

OTHER
MEN'S DAUGHTERS

Richard Stern

訳者略歴 昭和6年生、昭和38年早稲田大学
大学院文学研究科博士課程終了、早稲田大学
助教授、英米文学研究家 主訳書「MF」(早
川書房刊)他多数

OTHER MEN'S DAUGHTERS by Richard Stern
Copyright © 1973 by Richard Stern
First published 1979 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan by
arrangement with William Morris Agency, Inc.,
through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo.

他人の娘たち

リチャード・スターン おれこそよしこ
大社淑子訳

印刷 1979.2.10 発行 1979.2.15
発行者 早川 清
発行所 株式会社 早川書房 東京都千代田区神田多町2-2
電話 東京(254)1551(代)/振替 東京・6-47799/〒101
定価 1800円
印刷 株式会社亨有堂印刷所
製本 株式会社明光社
落丁・乱丁本はお取替えいたします
0397-870170-6942

他人の娘たち

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1979 Hayakawa Publishing, Inc.

A
の
た
め
に

駒に跨り、このまぬ旅に物思ひつつ、
われ往日、とある道をゆき、
道半にて旅人の
扮装、輕き《愛》にいであふ。

——ダンテ『新生』

(山川丙三郎訳)

1

1

メリウエザー邸——この九十年間というもの、近所ではこの呼び名で知られていたのだが——は、ハーヴァード広場から歩いて三分のところにある。エイコーン通りの南西の角から二軒目——アッシュ家とホーソーン家には含まれた百ヤードにわたる邸で——破風造りの木造、張り出し窓でふくらんだ家だ。「秋の色をしてるわ」と、メリウエザー家の一人の子供が言ったことがあった。この家は三階建てで、小さな楕円形の芝生に植えられた大きなアカシアの木の後に、そびえ立っている。この数フィートばかりの、季節ごとに新しい装いとなる土の部分で、しょっちゅうメリウエザー家の会話にのぼった。「あの木に葉っぱが出てきたわ」「また芝刈りをしなくちゃ」（芝刈りは六十秒ですんだ）「おまえの自転車は芝生の上にあるよ」などなど。

マンハッタンの住民なら、ケンブリッジを「田舎」だと考えるかもしれない。しかし、ケンブリッジは心底では都会的なのである。ということとはつまり、そこに生え育つものは何であろうとみんな、人間的寛容さのしるし、または、見栄えのよさといったものを身につけているということなのだ。

メリウエザーがこの家から出ていく日まで——それは、彼の離婚後一カ月経ってからだった——

メリウエザー家の家族は、理想的なほど平穩な家族にみえた。両親と子供たちは、しょっちゅう客間に集まり、それぞれお気に入りの場所でお本を読んだものだった。プリシラは炉火の明かりの側、他の者は、パイ皮のようなばら色と琥珀色のガラスの傘がついた古いスタンドの明かりの側で。何年も煖炉の熱で暖めたおかげで、縞の壁紙はふくれあがっていたし、また、他のいろいろな圧力が加わって、肘掛椅子やヴェルヴェット貼りのソファは、こちこちに固くなっていた。

メリウエザーは何年もの間、妻のサラが、アギー叔母の家に手を入れてきれいにしようとしないうちに、苦情を言いつづけてきた。妻がそうしないのは、肉体的快楽に対する禁欲的な輕蔑に名をかりた、ケンブリッジ式怠けぐせのあらわれなのだろうと、彼は考えていた。何年もの間、そうしたケンブリッジ式プラトニズムのおかげで、メリウエザー家の人々のお尻の端は、本来なら居心地よくしてくれるはずの椅子のコイルに、ぐりぐりと触れてしまうのであった。

「ちくしょう、どれもこれも。サラ、満足にすわれるような椅子があったらいいんだがね」

「もちろんよ、ボビー」

「ぼくが出かけて行って、いくつか椅子を買ってこなくちゃいけないんだらうね」

「そうして下さればありがたいわ」

「やれやれ、ありがたいわ、か。だが、どこに買いに行けばいいんだね」

「訊いてみるわ」

ちょっとしたジェスチャーゲームだった。サラは、＼まじめで、明るい目をした、感じがいいが役立たずの好古家＼で、メリウエザーは、＼無力な思想家＼であった。二十年前、二人は、ダブルベッドの片端で密通したものだ。その間、サラの同室者は、ベッドのもう一方の端で眠ったふりをしていた。その頃ですら、彼らの頭のなかには、おたがいに話しあっていることよりずっと多

くの世界がつまっていたものだった。

壁にひびが入った、暖かい銀色の居間で、親子が暖炉のまわりに、不規則な三日月形を作っていた。ウィリアムズから帰郷していた長男のオルビーは、ソファの上に寝そべって、マキアヴェリの『講義録』を読んでいた。彼は、毛深く、がっしりした体格の、目鼻立ちの整った青年で、濃い茶褐色の、柔和で、近視の眼をしている。政治的には保守的で——見分けのつくありとあらゆる潮流にひそかに反抗し——彼が好んでとる態度は、遠回しに皮肉をいう、ということだ。プリシラは彼に向って、あなたは冷静に見えるけど、中世の匂いをするわ、と言う。プリシラは、柔かい網の目状の暖炉用スクリーンから一ヤード離れたところに、横になっている。彼女は、緑色の鹿皮のベストを着、真紅のズボンをはいている。裸の足首のところで、大きなベル型に開いている、いわゆるベル・ボトムと称するものだ。焰が、彼女の長い褐色の髪に金色のうねを浮き上らせ、緑色の眼をちらちら金色に光らせている。彼女は、アメリカ航空宇宙局から送られてきた、金属の疲労に関するパンフレットを読んでいる。何年もの間、彼女は宇宙飛行士養成のための通信教育を受けており、アメリカ航空宇宙局の教育専門家が作った数学や工学の練習問題をやってきた。しかし、最近は大部分の時間を詩の勉強にあててはいるものの、彼女はいまだに、宇宙飛行士になる望みはすていない。

ティプトン祖父の肖像画の下には、エズミが坐っている。どうかするとプリシラよりずっと美人になりそうな彼女は、長く平べったい身体で、足にはサーカスの演技主任のようなブーツをはいている。小さなブラジャーが、ボタンを外した青い作業用Yシャツの上半分からのぞいている。プリシラより金髪で、はっきりした目鼻立ちの彼女は、姉よりずっと夢見がちの女の子で、雑誌『グラマー』を読んでいる。

いちばん年下のジョージは、眉のところまで前髪を垂らし、父親の青い眼と、母親のがっしりした体格を受け継いでいる。片手に鉛筆を握って、彼は、メリウエザー家のある隣人が書いた子供の本のタイプ原稿に手を入れている。この隣人はすでに、一冊の本を「私の几帳面な批評家G・M」に献呈してくれた。

メリウエザー博士はここで、古風な安堵感を覚える。彼は、ニューヨーク州産のシャブリを飲み、『シンベリン』を読む。彼がこの戯曲を読むのは二十五年ぶり、シェイクスピアの課程をとっていた学部時代以来のことだ。ふしぎな力に充ちた難解な言葉と、口あたりのよいぶどう酒とが、この静けさを甘美なものにしている。この居間、火のはぜる音、夕餉の支度をしている台所から聞えてくるかすかな食器類の触れあう音、子供たちの美しさと束の間のまじめさが、何カ月も彼の心を捉えていた気遣いを溶かし去ってしまうかのようだ。この戯曲は、異常や、正確、極端と抑制とが、はなはだしく混ざりあったものだ。それは、「自己達成は自己否定」という、昔ながらの岩のような道徳原理の上に、どっかりと坐っている。彼は読む。「慣習にそむくことは、すべてのものにそむくことだ」「だが、これは真実であろうか」と、メリウエザーは考える。生命より慣習の方が濃くたちこめているこの居間は、彼自身の背徳行為を、顕微鏡の標本のように、はっきりと見せつける。

「あの居間は、たそがれ時がいちばんいいわ」と、アギー・ティプトン叔母が言ったことがあった。アギー叔母もまた、背徳者であった。三十年間彼女は、結婚しないまま、ラウダン・ストーンサイファ氏と同棲していた。この家はいまだに、電線やスピーカーや、ブザーや色つき照明の遺物で飾られている。そうしたものはみんな、彼とアギーとが、おたがいに言葉は使わないでも意志疎通ができるように、設置されたものであった。（卒中で、いつ口が利けなくなるかわからないでしよ、

と叔母は言った)

「メリウェザー家の人間は一度も、国民総生産を増加させる必要を感じたことはないのですよ。あるいは、心の狭い道徳を甘やかす必要性もね」と、アギー叔母は言った。そのような誇らしげな格言が、ケンブリッジの市民生活に対する背徳行為を支えていた。もっとも、彼女の甥にとっては、変人であるとはいえ、彼女はそれが許容される限度というものを適当に察して手加減しているようにみえたけれど。

「お願いだから、この点では私を信じておくれ——私は、自分のほかは何人からも奪いはしないのだから」という言葉を彼は、『シンペリン』のなかに読んだ。このことを、子供たちにわからせることができえしたら。このことが真実でありさえしたら。彼は、^{なんげと}「ぼくは安らかで、しあわせなんだ。今は美しいひとときだ」と考えるときですら、四、五時間の後には自分が、彼らに聞えないところまで歩いてゆき、裏階段を下り、背徳行為の原因であるひと、つまりシンシア・ライダーに電話をかけるだろうということに気づいている。彼は、この若い女性のために、今の美しく人間的な時間を作りあげている千もの慣習をほぼ諦めてしまおうとしているのだ。

「愛」と、メリウェザー博士は考える。名高い、凍った言葉、幾千もの思いを秘め、あれほど多くの物語や騒擾の原因となった言葉。

彼は、生理学概論の課程を教えるとき、ある講義を次のような言葉ではじめる。「紳士淑女の皆さん、今日は愛の話をしましょう。つまり、脊椎の第三および第四仙骨関節を通り、外陰内部神経沿いに座骨腔に達する信号にしたがっておこる静脈腔の膨張と、同じく、輸精管のなめらかな筋肉層、精囊、前立腺および会陰の横紋筋における推進力のある波状的収斂作用とについて話しましよ

う。こうした事柄が、射精につながるわけです」

彼のまじめな口調のせいで、教師の機知に反応する笑いは起らない。学生たちに笑ってもらいたければ、彼はこういうだろう。「それが、紳士諸君、おそらく淑女諸君も同じでしょうが、きみたちをベッドの中でのたうち廻らせるものなのです。何とかそれに近い有様にね」もつともふだんは、精神と肉体との関連の問題、末梢感覚濾過組織、脊柱障害、隨翰の膨張と発泡現象、第二脊椎円錐の分裂と消滅などを彼は考究するのではあるが、細心の講義者であるから、彼は愛について語るときを忘れはしない。(非専門の学生にたいしては、より把握しやすい概念を与えて、専門コンプレックスを緩和してやることが重要なことから)。彼は、ジョン・ロックの定義を引用する。「『現存の、あるいは不在の事物が、自分のうちに惹きおこしがちな喜びの概念について思索する人は、何人であらうと、われわれが愛と呼ぶものについての認識をもっているものです』。きみたちのなかにいる哲学者は、『喜ぶこと』と『喜びについて考えること』と、『喜びの概念について思索すること』との違いに、気づくことでしょう。私は、後世の分析学者がこの図式を簡素化したのだと考えています。たとえばフロイトは、愛を、軽度の精神異常だと言っております」あるいはまた、メリウェザー博士は、講義に変化をつける引喻の仕方を変え、バルザック、メヌ・ド・ピラン(十八・十九世紀のフ、ランズの哲学者)、レミ・ド・グールモン(十九世紀フランスの小説家、批評家)やスタンダールのような、愛に関する素人人生理学者について語る。「私が考えますには、フランス人の分析能力は、科学より文学の方面により多くあらわれております」同じ講義のなかで彼は、宮廷風の恋愛について述べたサラの修士論文の助けをかりる。この論文は情緒を大ざっぱに図解してみせたものであったが、このなかには、生理学上の図解と一致する貴重な特質があった。しかし、外陰内部神経がなかったとしたら、愛の発明といえども、中世の西欧生活の残忍性を手なずけることはできなかったことであらう。サラは、古

代、戦争から愛への方向転換がなされたときに、女性の再生が始まったのだと論じていた。（いまでは、彼女の進行方向は逆になってしまった）

あの頃彼は、彼女の仕事に魅せられていた。彼女は、修士論文の各章を書き終えたとき、それを彼に読んでかかせた。カメオ細工のような頭をしたあのがっしりした小柄な精力家は、どういふふうにしてあれほど多くのことを学びとったのであるか？ プロヴァンス語、古代フランス語、スペイン語。あの美しい鳥の鳴き声のような音声が、彼女のハスキーなかわいい声から、えんえんと流れ出てきた。ひとひねりした性的魅力をもたぬディートリッヒの声。あのずんぐりしたかわいい女の子から出てくると、その声にはまったくうっとりさせられたものだ。

彼は、自分の仕事を彼女に説明した。黒真珠のような眼が、興奮して輝いた。科学を勉強すればほんとうによかったと思うわ。そうすれば、あなたのおっしゃることをほんとうによく理解できたでしょうに。だが、彼女はじっさいに理解していなかったばかりでなく、わかったふりをするにすっかりあきあきしているというのを、二人が悟ったのは、どのくらい経ってからだっただろうか？ メリウエザー博士は後退した。それから、五、六年前には、サラはわかったふりをするのをやめてしまった。彼女は、心のたがをゆるめて、非常に頑固な小柄の婦人になってしまった。

その婦人が言った。「こういうことなの。私は靴拭きマットじゃないし、あなたはインシュタインじゃないのよ」鎧を着たヴィーナス。あらゆる人の言動を訂正し、あらゆる人にお説教をする新しいサラ。プリシラがフランスの詩に興味を抱いたとき、サラは昔のテキストを持ち出して、ラドクリフ（アメリカの著名な私立女子大学）流の警句を述べはじめた。『「ロマンスの精神」は断じて權威のある書物じゃないのよ、おまえ。パウンド（二十世紀アメリカの詩人）は熱情的だし、才能もあったわ。だけど彼は、な、い、ん、に、も知っちゃいなかったわ。彼は『クレストマシイ』を一冊買つて、そのおかげで学者になれたと思ひ